さかき　ひで　のぶ
榊　秀信

名古屋に発明の鬼才あり
－国産初の１６ミリ映写機の開発－

榊　秀信（1898 ～ 1989）
写真：榊文男氏提供

■生い立ちから榊商会発足　－好きな道に熱中して－

大河内秀信（のちの榊秀信）は1898（明治31）年に愛知県海東郡大井村（現在の愛西市大井町）で、父虎次郎、母よしのの三男として生まれた。父が2歳の時に他界したのち苦しい生活を送り、兄がタンス店に奉公したのを機会に、母と兄とともに名古屋市古渡町に移住した。小学3年生でカンザシ類製造のカザリ屋に手伝いとして入り、細工物づくりに打ちこんだ。小学校を5年で中退し兄のいるタンス店に丁稚奉公ののち、名古屋でも知られた大工の棟梁の榊治郎吉に弟子入りした。

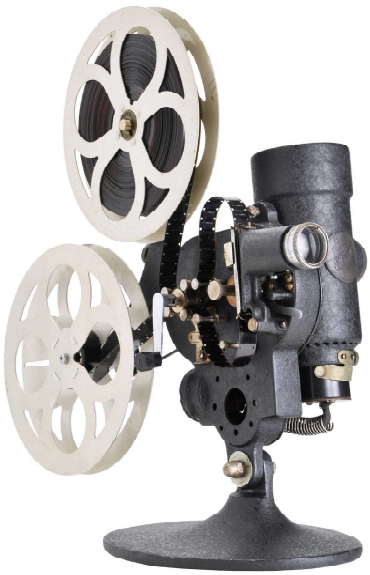
棟梁は当時まだ珍しい写真機を所有し、やがて写真機の修理を引き受けるようになり、部品の販売も始める。大工の傍らそれを手伝い、修理と部品製作に熱中した。2年間兵役に就いたのち、22歳で榊家へ養子として迎えられ長女栄と結婚。名古屋市中区梅園町に移住し、榊姓を名乗るようになった。棟梁の理解を得て大工をやめることを決心し、写真機の修理や写真用品の製造販売を行う榊商会を1921（大正10）年に立ち上げ、中区西日置町に店舗を構える。翌年には写真引き伸ばし機を完成し、「クイン式引伸機」と称して販売。初めての特許を出願し、取得する。

■国産初の16ミリ映写機（エルモA型）とエルモ社設立

ラジオ本放送の開始に刺激され、1925（大正4）年に名古屋無線電信学校に入学を希望するが、中学卒業でないため許可されず。校長に掛け合って特別に入学を許可される。同校で6ヶ月間、ラジオの基礎知識を学ぶ。ラジオに必須の部品バリコン（バリアブル・コンデンサー）を製品化し、ラジオセットの製造販売も行う。

偶然に玩具の輸入映写機を入手したことから、玩具「ヒコーキ印35ミリ映写機」を苦心の末に完成させ販売にいたる。1927（昭和2）年、国産初の16ミリ映写機を完成させ、「エルモ16ミリ映写機A型」として販売した。これは光源反射式で手回し式であった。さらなる改良を進め、モータや映写電球を国内各社の協力を得て開発し、画期的なフィルム送り機構を開発するなどして、1930（昭和5）年に純国産機といえる「D型」の製品化にいたる。1933（昭和8）年には合名会社エルモ社を設立した。ELMOはElectricity、Light、Machine、Organizationのイニシャルの組み合わせ。明るい映写機として定評をえた「F-500型」に続き、名機といわれた「躍進号」を1935（昭和10）年に発売する。初のトーキー映写機「YUT号」も製品化した。エルモ映写機は世界33か国に輸出され、その優秀さは海外で認められていった。また、映画教育運動の活発化の機運の中で、国産16ミリ映写機は、学校教育や社会教育の教具に採用され、映画教育（戦後、視聴覚教育と呼ばれる）に大きな役割を果たしていった。

16ミリ映写機製造中の榊秀信
写真：榊文男氏提供



エルモ16ミリ映写機Ａ型
写真：榊信之氏提供

（黒田光太郎）